

●コレクション・データ

時代 古墳時代 前期
 調査 唐古・鍵遺跡 第5次調査
 発見年 1978年
 大きさ 高さ 28.5 cm、口径 15.1 cm
 胴径 24.7 cm
 展示位置 第2室・「弥生の住まい」



赤塗りの壺

唐古・鍵遺跡は、弥生時代の環濠集落として有名ですが、古墳時代まで集落は継続します。特に、古墳時代前期には弥生時代の環濠を再掘削し、再びムラを囲むこととなります。今回は、この古墳時代前期の集落に伴う井戸から出土した壺を紹介しましょう。

この壺は、球形の胴部に短く外反する口縁部がついたもので、考古学では「直口壺」と呼んでいます。土器の表面には、赤色の水銀朱が全面に塗られ、底部には人為的にあけられた小さな穴があります。

この井戸からは、これ以外にも人為的に口縁部を打ち欠いた赤塗りの壺、甕や田舟が出土しています。このように壺の底部を穿孔したり、口縁部を打ち欠いたりする行為は、弥生時代からみられ、「仮器」としての祭祀的な性格があったと考えられています。このような土器は、墓や井戸への供献用土器として使われたもので、今回紹介する土器は、まさに井戸祭祀に利用されたものでしょう。

ところで、土器を赤く塗る風

習は、弥生時代中期の北部九州にみられ、全面を赤く塗った壺・器台・高坏などを、甕棺墓に伴う祭祀穴に供献しています。また、弥生時代後期から終末期の東海でも、壺や器台・高坏・鉢などに赤塗りをした祭祀用の土器が知られ、「パレス・スタイル（宮廷様式）」として有名です。

しかし、弥生時代の近畿では土器を赤塗りする風習はみられず、日常で使用した土器を人為的に穿孔して、祭祀用土器に転用するケースがほとんどです。民俗学では、日常の生活を「ケ」、節目に当る祭日を「ハレ」と呼びますが、弥生時代における土器祭祀は、「ハレ」と「ケ」が未分化な状態とみることもできます。

一方、古墳時代に出現する赤塗りの壺は、祭祀専用の土器として新たに創出されたもので、「ハレ」の土器とした特化したものと考えられます。その系譜をめぐっては、不明な点も多いですが、古墳時代における新たな祭祀形態の成立を考えるうえでも、注目される資料でしょう。

唐古・鍵考古学
 ミュージアム
 【 ☎ 34・7100 】

開館時間 午前9時～午後5時（月曜は休館）
 観覧料（カッコ内は20人以上の団体料金／15歳以下は無料）
 ▼大人 200円（150円）
 ▼高校生・大学生 100円（50円）

ミュージアム上面図と展示位置

